

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人 演劇のまち振興事業団	
施 設 名	能登演劇堂	
助 成 対 象 活 動 名	普及啓発事業	
内定額(総額)	2,292	(千円)
公 演 事 業	0	(千円)
人 材 養 成 事 業	0	(千円)
普 及 啓 発 事 業	2,292	(千円)

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>新型コロナウイルス感染拡大のため、3月15日に予定していた「まちなか公演」が中止となった。</p> <p>そのほかは当初の計画通りに事業が進められ、能登演劇堂を核として「演劇のまち発信」と「演劇文化によるまちの活性化」が図られた。</p> <p>市の総合計画の芸術・文化部門では、「地域に根ざした演劇文化の振興を図ること」としており、この事業を通して地域の特性に基づきまちの活性化が図られた。</p> <p>舞台奥大扉が開き、自然と舞台が一体化する世界に類を見ない「演劇専用ホール能登演劇堂」。その特徴である舞台奥大扉を開いた演出効果のある高校生ワークショップや市民劇団公演を中心に、小学生アウトリーチなど幅広く市民に演劇文化を広めることができた。</p> <p>①高校生ワークショップ</p> <p>夏休み期間を活用した4日間のワークショップとし、中部6県の高校生が参加しやすいようにした。最終日には舞台奥大扉を開いた演出で成果発表を行った。</p> <p>②市民劇団公演</p> <p>大道具・小道具の製作など市民や地元高校演劇科の生徒がボランティアで参加し、キャスト・スタッフともに市民が中心となり公演を成功させた。</p> <p>③小学生アウトリーチ</p> <p>慣れ親しんでいる教室を会場とし、演劇ワークショップを楽しんでもらった。また、講師は、地元高校演劇科の講師でもある県内の劇団員とした。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>演劇文化によるまちづくりを進めるなかで継続して普及啓発活動を行ってきた。</p> <p>普段、劇場で演劇を観ない市民が演劇に触れることにより、演劇文化を広く市民に親しんでもらえたことや、七尾市が能登演劇堂を核として演劇のまちを発信していることが広く社会に浸透してきていると思える。</p> <p>一般的に、公共ホールが年間を通して自主事業を行っていることは多くはなく、また、収入の大部分が行政の補助金や国の助成金などに頼るなか、能登演劇堂においては入場料率も高く維持している。</p> <p>そのなかで、チケット収入の無いワークショップや、チケット料金の低額な市民劇団公演など、採算性の低い事業を助成による普及啓発事業として行ってきたことは、社会において演劇を通したまちづくり・人づくりに大きく貢献していると言える。</p> <p>能登演劇堂の名は、広く県内外に知られてきており、地元高校演劇科の舞台技術の授業や卒業公演など演劇教育も浸透してきている。また、高校生ワークショップでは、中部6県から多くの高校生及び教諭が参加し、市内に宿泊することによる経済効果もあった。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

①高校生ワークショップ

中部6県の高校生が、夏には能登演劇堂でワークショップを行い、最終日には舞台上で成果発表することが定着しており、演劇に興味があり活動をしている高校生にとっては大きな意義がある。また、ワークショップでは、4つの分科会とし、生徒が自分の興味がある分野を学べることから評判も良く、夏休み期間中の貴重な体験となっている。

参加者数 富山県18人 石川県22人 福井県17人 岐阜県35人 愛知県21人 三重県7人

- 分科会
- 1 殺陣で作る言葉を用いない芝居表現、感情表現
 - 2 大きな声で歌って踊る妙なミュージカル、妙一ジカルをやってみる
 - 3 関係性を知るWS
 - 4 光と舞台のワークショップ

②市民劇団公演

一流の演出家による指導や、市民が劇団員と共に大道具などを製作したことでスタッフの育成に繋がった。また、大道具や小道具の製作では、地元高校生演劇科の生徒や卒業生が参加しており、能登演劇堂の支援の輪が広がってきている。

脚本・演出 原田一樹（劇団キンダースペース主宰）

出演 劇団N16名

協力 キッズクルー 劇団夢宇人 梅若演劇衣裳店 リックスやま岸 山成文具店
白山市演劇協会 石川県立七尾東雲高等学校演劇科 劇団キンダースペース

③小学生アウトリーチ

県内の劇団が講師となり各学校でワークショップを行う事で、児童に教室で普段の授業とは異なった演劇教育を親しんでもらい、普及事業として有意義であった。

参加者数 山王小学校60人 朝日小学校32人 中島小学校27人 能登島小学校15人

講師 テンシーズ

代表の黒田氏は石川県立七尾東雲高等学校演劇科非常勤講師

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

[計画]

事業期間 8月17日 ~ 3月15日

収支予算 助成対象経費 5,953千円 助成金額 2,292千円

[実績]

事業期間 8月17日 ~ 1月30日

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、3月15日のまちなか公演を中止とした。

収支決算 助成対象経費 4,308千円 助成金額 2,152千円

①高校生ワークショップ

4日間のワークショップは、夏休期間中であること及び、滞在費の点においても適切な日数であった。事業費のうち講師謝金などの助成割合は4分の1程度であり、大きな成果を上げた。

②市民劇団公演

演出家はじめスタッフは、市内の空き家を借り入れて宿泊し、経費の削減に努め、また、大道具の製作などにおいても劇団員や演劇科生徒、卒業生などがボランティアで携わることで製作費を抑え、ほぼ計画通りの事業費で行った。

③小学生アウトリーチ

事業費は県内劇団の謝金だけで、費用対効果が大きく、計画通りの成果を上げた。事業期間は、当初秋頃を予定していたが12月~1月となった。今後は、実施期間の要望等精査して行きたい。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

能登演劇堂は、全国的にも類を觀ない演劇専用ホールで、俳優の仲代達矢氏が監修し平成7年に開館した。

最大の特徴は、舞台奥の大扉が開き自然と一体化した演出ができるところであり、この事業においても大扉を開いた演出を行った。

①「演劇文化でにぎわうまちづくり」を目指す演劇専用ホール能登演劇堂

②俳優仲代達矢氏が監修し、名誉館長及び七尾市名誉市民となっている。

名誉館長就任後は、仲代氏主宰の無名塾の演劇を毎年開催しており、4年に一度地方ではまれなロングラン公演を開催している。

・仲代達矢氏 2015年 文化勲章

・ロングラン公演

1997年 第1回「いのちぼうにふろう物語」 30公演

2001年 第2階「ウィンザーの陽気な女房たち」 23公演

2004年 第3回「いのちぼうにふろう物語」 25公演

2009年 第4回「マクベス」 50公演

能登限定公演

2013年 第5回「ロミオとジュリエット」 25公演

2017年 第6回「肝っ玉おっ母と子供たち」 25公演

③舞台奥大扉が開き、自然と舞台が一体化する世界に類を觀ない演劇専用ホール

・高校生ワークショップでは、舞台奥大扉を開き成果発表を行った。

・市民劇団公演では、舞台装置や小道具などは、プロの指導のもと劇団員や市民、高校演劇科の生徒や卒業生が製作し、スタッフの育成を図った。

・小学生アウトリーチでは、会場を教室とし、楽しく演劇を学んでもらった。

④バックステージツアー及び演劇のまちあゆみコーナー

・バックステージツアー

舞台奥大扉の開閉と楽屋など普段見ることのできない場所を見学。

・演劇のまちあゆみコーナー

能登演劇堂のこれまでの取り組みや、演劇によるまちづくりの歩みを展示・紹介。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

能登演劇堂でワークショップや市民劇団公演を行ったことは、「演劇専用ホールでも市民が舞台に立てる」、「能登演劇堂で演劇を行ってみたい、発表を行ってみたい」など、市民の実演芸術の振興に寄与している。

高校生ワークショップでは、音響・照明のプランや操作、舞台奥の大扉の開閉などの技術提供を行っており、外部スタッフの手配などの必要はない。

また、市内の高校演劇科の卒業公演でも技術提供を行っており、文化芸術の発展に繋がったと認められる。

ホームページでは、市民劇団員の募集や、一般公演でのエキストラ募集、劇団との交流会の開催など、広く情報発信し「演劇文化によるまちづくり」を進めている。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

能登演劇堂運営組織

- ・公益法人 演劇のまち振興事業団

七尾市より指定管理を受託

事業団職員5名のうち、正規職員4名、臨時職員1名で正規雇用率は80%。

人材育成として、研修会への参加、業務に係わる資格〔危険物取扱など〕の取得の推進。

ボランティアでは、公演時のもぎり・会場案内スタッフ、舞台装置・小道具の製作スタッフなど支援の輪が広がっている。

財政面

財源として、施設の管理費は指定管理料、運営費の一部は補助金としている。

安定的財源確保として、賛助会員より協賛金として法人3万円/1口、個人1万円/1口とし、法人については60社、個人については40名ほどで推移している。会員数が減少傾向のため、法人についてはこれまで1公演の招待/1口を、2公演の招待とし会員数の維持に努めている。

また、観劇会員として友の会があり、今年度より会費の値上げを検討したが、経費削減等で対応することとした。会員数は、昨年に比べ約100名減の950名であり、引き続き会員数の維持・増加に努める。

ネットワーク

石川県公立文化施設連絡協議会に所属しており、情報交換、技術研修の参加を行っている。

また、県内劇場とのネットワーク事業は数年に一度取り組んでいる。

教育機関とのネットワークでは、今年初めて大学生による一軒家を借りての合宿、成果発表があり、市民との交流や地元を題材にした演劇など大きな成果があった。

今後も引き続き開催して行くよう連携して行きたい。